⑵ 京町家の暮らしと地域コミュニティ

町なかに多く残る京町家は，京都の伝統的な都市住宅の建築様式を今日に伝え，京都の魅力的で個性的な町なみ景観を形成する重要な要素となっている。また，京町家は人々の暮らしや生業を支えるケの場であるとともに，人々の暮らしの中で営まれる祭事などのハレの場でもある。京町家に住まう人々は，それらのハレとケの営みや自然とのかかわりの中で，京町家のしつらえを様々に変化させ，めりはりある暮らしを営んでいる。

例えば，掃き清められ打ち水されたオモテ，軒先に掲げられた祭提灯や幔幕，格子をはずして家宝を飾る祭座敷など，まさに町衆の暮らしの文化を感じる。また，軒先に掲げられた屋号を染め抜いた暖簾，もれ聞こえてくる機織の音，染の染料の匂い，店の間に飾られている様々な伝統工芸品など，ものづくりや商いの文化を感じ，そして，通りを挟んで育まれてきた同業者町のつながりを感じる。このように，京町家は，京都の永い歴史の中で育まれてきた様々な都市居住文化を今日に引き継いでいる。

この項では，京町家という歴史的建造物についての概要と，京町家を取り巻く地域の自治の歴史，現状について示した後，京町家の暮らしに見る歴史的風致を示していく。

ア　京町家と地域コミュニティの概要

現在京都に残る京町家は，概ね昭和初期頃までに建設されたものである。図2-27は市街地の変遷を示しているが，中心からピンク色に塗られた部分は昭和１３年（１９３８）頃の市街地の範囲を示しており，この区域に多く残っている。

京町家は，木造軸組みの伝統構法による戸建，長屋の都市住宅であり，瓦葺で平入りの大屋根を持つ。また，ベンガラ塗りの大戸，木格子戸，格子といった特徴的な外観を有し，軒を連ねて通り景観を構成している。

⑺ 京町家の歴史

その起源は，平安時代中期の１０世紀ごろとされている。律令制度の衰退と共に地方から徴用されてものづくりや商いを営んでいた人々が都市住民として定着するようになり，自らの意志で自らの生活のためにものづくりや商いを営むようになってきた。こうして徐々に力を付けてきた都市住民は，自らの暮らしの拠点を大路，小路に面した

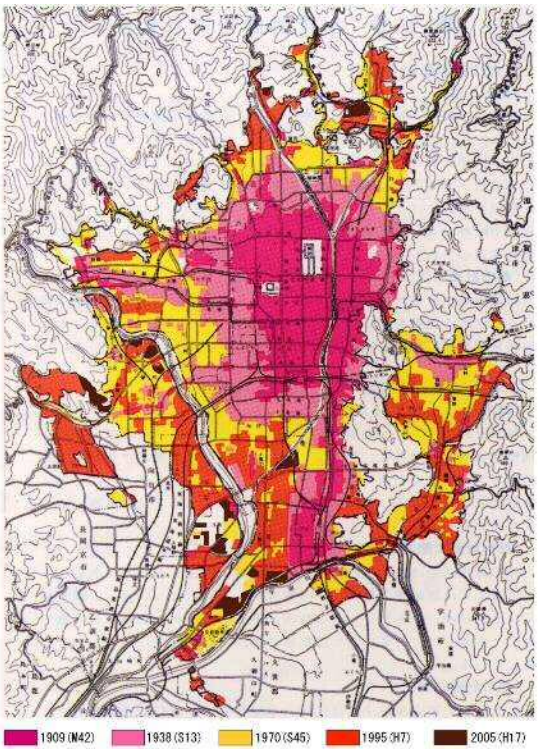

図2-27　市街地の変遷

空間に求め，築地塀にもたれ掛けて小屋を造った。これが京町家の始まりであるとされている。

更に力を付けた都市住民は，公家から通に面した屋敷地の一部を買い取り，築地塀を壊し，通りに面した建物を建築するようになる。こうして通りに開いて商売を行う京町家の原型は，軒を連ねて建ち並び，その店に用事のある都市住民が頻繁に通りを往来するようになる。

通りは，単に通行の用に供する都市施設ではなく，コミュニティの場となり，会話や祭りなどが営まれ，ついには公衆便所のような施設さえ見られるようになり，通りを挟んだ両側町というコミ

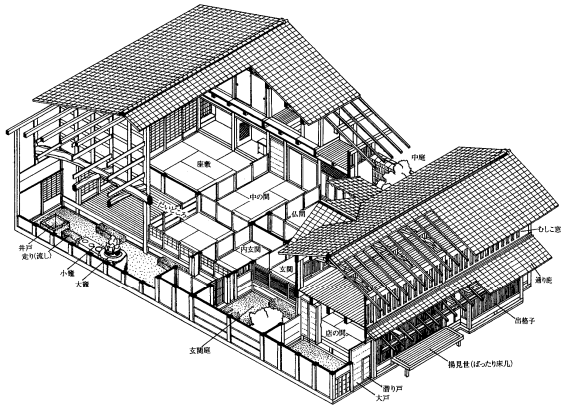

図2-28　京町家のつくりの例「表家造」

イラスト：谷直樹・増井正哉「まち祇園祭すまい」思文閣出版1994年